

文 化

湘南の海水浴史 泳ぎ続け

◇鉄道延伸で観光地化 ライフスタイル発信の場へ◇ 大矢 悠三子



日本に海水浴が伝わったのは幕末、長崎の医学伝習所を通してだ。オランダの軍医ボンペが、欧州ではいい海岸がなくて

難しいが、日本なら海水浴も可能かもしれないと松本順に話したという。明治に入り、富国強兵

のため強い身体をつくることが意識され、同時に江戸時代終盤から度々流行していたコレラへの対策が本格化した。衛生知識を研究・普及させるために発行した『内務省衛生局雑誌』には「海水浴

説」という論考が残る。海水浴の契機は、現在では陸地となった富岡(現・横浜市金沢区の一部)に求められる。ヘボン式ローマ字で知られる

宣教師ヘボンや居留地の外国人が、日本の高温多

湿の気候で疲れた体を癒やすため海水浴をした。その後、富岡には三条実美や井上馨ら貴顕紳士が争うように別荘を持った。当時の新聞には、富岡で海水浴、という記事が並んだ。各地で海水浴場が開設されたのはまもなくのことだった。

当時の海水浴は、海の中に建てた棒につかまり、波を浴びて身体を鍛えるものだった。水温はセ氏22〜28度、海底が砂

石状態など様々な条件があった。海水浴とは、その名の通り、海の水を浴びるという医療行為として導入されたのだ。

そのなかで湘南地域の海水浴場が抜きでたのは、1887年(明治20年)の東海道線国府津延伸の影響が大きい。大磯にも鉄道駅ができ、同年、旅館・榊龍館が催した賑やかな開業式の様子が報道されて以降、医療行為である海水浴に現代に通じるレジャーの要素が付

加された。1902年(明治35年)に江ノ電が開通し交通網が徐々に整うと、江の島や鎌倉での海水浴が爆発的に広まった。貴顕紳士の保養だった海水浴は大衆化し、庶民のレジャーとして受容されても、湘南への憧憬は続いた。

戦後、湘南の海に新たなブームを呼んだのは、石原慎太郎の小説で映画化もされた「太陽の季節」で、「太陽族」は湘南の

海を席卷した。海水浴場の人の波は「芋を洗う」と表現され、小田急江ノ島の混雑ぶりは写真に撮られるほどだった。

海水汚染のため海水浴が下火になっても、湘南の海は人々を惹きつけ続けた。近年、湘南はライフスタイルも発信し、湘南の海のある生活に憧れを抱く人は多い。私の研究は新発見というような派手なものはない。だが、何となく周知されている事実を実証していくことも大切だと教えてくれたのが海水浴と湘南だった。心から感謝し、私の海を泳ごう。(おおよ・ゆみこ)元・統藤沢市史編さん委員

海水浴は夏の代表的レジャーだが、その歴史は意外に知られていない。世に海水浴場発祥の地として著名なのは初代陸軍軍医総監を務めた松本順が関わった神奈川の大磯で、開設は1885年(明治18年)のことだ。実はそれ以前、医師で藤新平が愛知の大野で、内務省の初代衛生局長を務めた長与専齋が三重の二見浦で海水浴場の開設に尽力している。では、なぜ大磯として湘南なのか、20年前、私は答えを探すことに夢中になった。大学院の修士1年目、治安警察法の研究過程で鉄道会社のストライキを検証していた私は「鉄道繋がり」で「江ノ電」担当として湘南研究のメンバーになった。名古屋出身の私は湘南出身の男性を指す「湘南ボーイ」を絶大なる誉め言葉であると信じていたが、地元の人はずしも快く思っていないと知って大きな衝撃を受け、この地に強く関心を持った。きっかけは「湘南ボーイ」だった。



医療目的で始まった海水浴。当初は棒につかまって波を浴びた＝大磯町郷土資料館提供

【速報】

『江ノ電沿線の近現代史』の著者が日本経済新聞2020年9月18日の文化欄に登場し、湘南の海水浴史について書いています。

一クロスカルチャー出版